

幸せでなくても、深く生きていける。『働くことがイヤな人のための本』

kairando

いつからだったのか、結局行き止まりに行き着いていた。休日が愉しくない。平日はもっと鈍い痛みを持つ日々。

ため息や独り言を知らずに漏らしていた。

憂鬱になる原因は仕事であったし、自分の目指すものや、やりたいことが年齢とともにかすんでいくことに対する焦燥であった。

仕事のせいにして、人間関係も、何をやっても、うまいこといかず、不条理を感じていた。

そんな日曜日の夕方。三宮のジュンク堂に立ち寄った。数時間したら、夕食を食べ終え、就寝し、出勤のために起床しないといけないと頭の片隅で計算しながら。

『働くことがイヤな人のための本』

何と人を食った、安易なタイトルか。くたくたと能書きの垂れた駄文だろうと思いながらも、ページの薄さに手にとって、めくってみた。

だが、手にとってみて愕然。自分が痛感していた不条理や、自分が誰にも相談できずに抱えていた焦燥が、書かれてあったのだ。

面白そうとか、役に立つとか、そういう計算はなく、俺のことを書いている本だという確信があって、レジに急いだ。

梅田までの電車の中で、夢中になって読んだ。帰宅してもベッドでページをむさぼるようにめくった。

働くことがイヤになった二十代、三十代、四十代、五十代の意見を象徴する、架空の人物と、筆者が対話して、意見を述べるという形式のフィクションである。

しかし独善にならず、かといって、一般論を語るのではなく、実に深い。

「よく生きるとは幸福に生きることではないことをしること、それが決定的に重要なのだ」

「でも、ここにしか自分の場はないと思えば、それをするしかない。こうした過酷な現実に打ちくだかれないうとき、それを引き受けてしごとを続けるとき、その人はみずからの場を見いだしたといえよう」

「それでも絵を描きつづけ、小説を書き続けるとき、それがいかに報われなくとも、君は仕事をしている。断じて趣味ではない」

などなど、気に入った部分に付箋を張り付けていたら、付箋だらけになってしまうぐらい。

自分が苦痛を感じていた原因は分かった。なんで、袋小路でため息をついていたのかも、明確になった。

(そうだ。不幸であっても、深く深く、それを深めてさえいけばいいのだ。幸福でないことを恨んで、苦しむなんて、なんて軽薄なんだ。どうせ死ぬのに。どうせ簡単に幸せになれるわけなんてないのに。どうせ苦痛に満ちているのが人生なのに)

幸せになろうと、安易にみんなが飛びついているのではない。そんなことも冷静に考えるようになった。

幸せになるために生まれてきた、なんてポップソングまがいのフレーズは確かに、耳障りがいい。

ところが実際、それは嘘だ。幸せになるために生まれてきたかどうかなんて、人によってまち

まちだ。幸せにならなければならないと、焦って苦しむなど、なんて不幸なことなのか。この矛盾を誰も指摘してくれなかった。

不幸から逃れようとして、みんなが心もとない、蜘蛛の糸にすがりついていないか。その踏みつけあう苦痛に目をつむっているくせに。

そもそも生きるとは、そんなに逃げ回ることなのだろうか。

読了後、いつも自分に自問するようになった。覚悟もなく、今更逃げ回ろうとしていないか。よく生きるとは、幸福になろうとすることでは、断じてないんだぞ？

不幸が怖くなくなってきた。どうせ死ぬのだから、身に降りかかる不幸と精一杯、がっぷり四つになって、苦しみ悶えぬいてやろうじゃないか。

誰かや何かに自分の運命を預けて、清算間際に呪いごとをいうなんて、甘えた臆病者の逃げ口上である。袋小路、上等じゃないか。

三年前に読み終えて、まだ時々読み返している。価値観を変えてくれたというより、自分の前提を根底から、覆した一冊である。